

# 朝比奈和紙

あきひなわし

岡部町・朝比奈は、お茶の里であると同時に以前は和紙の里でもありました。茶と和紙は切っても切れない関係があつて、茶の発展に伴つて和紙の生産も増加します。

その関係とは、茶を乾燥させるために使う焙炉という機械の乾燥させる部分に和紙を使うからです。

また、茶を保存したり、運搬包装に使う茶袋もこの和紙で作られていました。

昔は、山の木を切ると焼畑にするか和紙の原料となる楮や三椏を植えたものです。朝比奈でいつごろから和紙が作られていたのかは不明ですが、江戸時代（一六〇三〜一八六七）中期には農家の副業として細々と冬のみだけ作られていました。

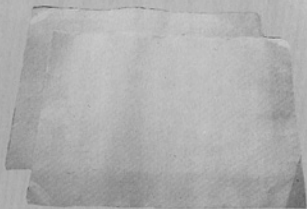
明治三十二年に伝習所が設置され、一枚

漉から二枚漉に改良し、同三十八年には美濃の国（岐阜県）より巡回教師を招いて大改良をはかり、四枚漉・八枚漉の和紙の製造を実現しました。

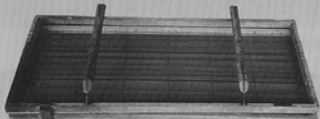
志太郎誌によれば、大正二年には岡部町の職人数は三百二人を数え、朝比奈村では、全戸の七割に当たる人たちが和紙作りに携わっていたといわれています。

この和紙作りも、昭和時代（一九二六〜一九八九）初期までは順調でしたが、戦後、茶の製造機械の進歩や茶袋の素材が変わったことで次第に衰退していきました。昭和三十年代にはまだ数軒製造していましたが、昭和四十年代前半になると、すべて姿を消してしまいました。

当時の道具は、岡部町立朝比奈第一小学校に保存されており、年に一度五年生の課外授業として、昔の製法による「和紙作り」が行われています。



朝比奈和紙



簀子



紙漉き舟